徳川家康、三度死す

第四回

講談師　一龍斎貞花

影武者について書いているが、現在でも北の将軍様の影武者の存在が取り沙汰されている。列車で移動の時主要席には影武者、将軍様は別の席だとか。一般の人は食糧難といわれる北朝鮮だが、影武者は、太った体重を維持するためご馳走が食べられるのは最高。

度々の危機のある家康に、影武者があって当然といえましょう。

慶長16年3月、二条城に於いて8年ぶりに豊臣秀頼と対面。

19歳と立派に成長した秀頼を見た本多正信は、この秀頼が先頭に立ったなら福島正則はじめ豊臣恩顧の諸大名が秀頼につく恐れがあると、

「今のうちになんとかしなければなりませんぞ」

黒衣の宰相といわれる金地院崇伝が、豊臣家が再建した方広寺の鐘の銘文、〝国家安康、君臣豊楽〟に目をつけ、家と康を分断し豊臣を栄えさせることを願ったものであると難癖をつけ、遂に大坂冬の陣の火ぶたが切って落されました。

今度は秀頼との戦いとあって、大坂方に付かれては大変と、正則を江戸城留守居役に封じ込めます。

「秀頼公に、大坂城よりご出馬頂き天王寺に布陣を」と、九度山から駆け付けた真田幸村の提案も、淀君の反対にあって退けられてしまった。

さればと幸村は、大坂城の弱点を防ぐために築いた世に名高い真田丸、東軍20万の大軍をもって押し寄せるも、幸村の作戦功を奏したった一日の戦いで徳川方の1万5千の兵を討ち取り、正に上田城勝利の再現。真田丸がどうしても邪魔で一ヵ月もの間膠着状態。

すると、淀君や秀頼側近の大野治長らと対立し、徳川方についた豊臣家の元家老片桐且元が、大坂城の絵図面を見せると、

「よし、大砲（おおづつ）で本丸を狙い撃ちじゃ、淀殿の部屋へお見舞いせよ」

大砲の届く天守までわずか７００メートルまで押し出し、間断なくドカンドカンとぶっ放し天守2階の淀君の居間へ撃ち込むや、

「和議など有り得ない」と、強情の淀君もにわかに弱気になり徳川と和睦。堀さえ埋めてしまえば力で落とせると、本丸の堀のみを残し他の総ての堀を埋め立てることが和議の条件。

「堀を埋められては、裸同然ひとたまりもない」

幸村たちが反対するも

「浪人達は、戦がなければ解雇される恐れがあり、だから戦いたいのであろう、もっと厳しい条件を突きつけられると思っていたが堀の埋め立てだけ。ここは休戦して高齢の家康の死を待てばよい」

勝つにはどうするか、生き残るにはどうするかを考えない無能の重臣たち。企業とて同じ目先の安易にとらわれ結局倒産少なくありません。

家康73歳、当時としては高齢もいいところ。ところが10歳も若い身代わりを起用し、老けさせていた。

ここに二の丸、三の丸だけでなく櫓、門、堀から真田丸もことごとく打ち壊し、おまけに本丸の堀も埋め立て裸同然にし、ここぞと徳川軍は元和元年4月

最後の総仕上げと、20万の大軍をもって大坂城を取り囲んだ。

「約束が違う」と、言ったってあとのまつり。豊臣の勝ち目なしと見てとった者は続々逃亡。

「秀頼様自らご出馬下されたい。徳川方についている福島、加藤、池田はじめ豊臣ゆかりの諸侯、秀頼公に弓引くこと出来ず兵を引くことでございましょう。某、家康の本陣へ斬り込み首を挙げて参ります」

幸村の起死回生の策も、

「御大将の出馬は許されぬ」と、却下され、大坂城の運命は決った。

家康三度目の死

時なるかな元和元年5月の7日

緋縅の鎧、白熊の毛つけたる鹿の角の前立打ったる兜を頂き、白河原毛の愛馬に打ちまたがり、十文字の槍を引っ下げ、

「我に続けーっ」

法螺貝の音高らかに、幸村を先頭に赤備えの真田隊3千、一丸となって茶臼山を駆け下り、金扇の大馬印を掲げたる家康の本陣目指してまっしぐら。

「敵の本陣目の前ぞ進め、進めー」

幸村他には目もくれず一気に突き進むその有様は、正に阿修羅王の荒れたる如く、厭離穢土欣求浄土の旗をはっきりと捉えた。

家康を守る旗本の面々、先陣が切り崩されるとは思ってもみなかった。

突如現れた六連銭の旗印、赤備の一隊に家康驚天。

「真田とあってはこれまで、わしは死ぬるぞ」

又もや切腹を覚悟するも、

「なんとしても、お立退きを」

「イヤ、もう駄目じゃ」

「そんな気の弱いことでなんとなさる。一刻も早くお逃げ下さい」

わずかな旗本に守られ足にまかせて必死で逃げる家康。

「真田左衛門幸村、見参！」

十文字の槍を振るって家康の旗本を突き倒し、まっしぐらに馬を走らせる。馬で追いかけられるのだから逃げ切れるものでない。

必死に防ぎ止めんとする旗本衆。

「おのれ逃がしてなるものか、家康待てーっ」

勇気凛々たる幸村の声に、家康思わず足が止る。ここぞと背後から、

「デイーッ」と、十文字の槍。

鎧も前面と違って後の備えは十分でなし。ものの見事に背中をプスーッ。

うつ伏せに倒れる家康。

「真田幸村　家康を討ち取ったり」

大音声に呼ばわった。

一大事と次々と駆けつける徳川勢に、流石の幸村も戦い疲れ手傷を負い引き揚げて行く。

家康討たれたとあって徳川勢茫然とする中に、本多正信大音な上げ。

「皆の者案じるな、討たれたのは影武者。殿はここにおられるぞ。手傷こそ受けられたがご健在じゃ。殿！皆にお言葉を」

「ウム、し心配かけたが余はぶ無事であるぞ。勝利を収めるまで気を許すでないぞよー」

近習以外、本物か影武者か分らない。事実はどちらも影武者。討たれたのが影武者2号。いかなることあるやもしれんと用意怠らず、正信と近習によって3号の家康が生存したのです。

流石の幸村も孤軍奮闘疲れ果て、田の畔道に座り込んでいる処を討たれ49歳をもって戦場の露と消えました。

壮烈な働きに島津藩主島津忠恒は、

「真田日本一の兵」と絶賛。

家督を秀忠に譲ったものの74歳にして先頭に立って采配を振るった家康。

豊臣を倒す執念に家来は驚くばかり。

「大御所様は、若返られた」

それもそのはず老衰で亡くなられては困ると、10歳若い影武者を老けさせ、見事徳川の家を守ったのでした。

家康が死ぬ度に、「俺が代って徳川の家を・・・」という家臣がいたならば、家臣同士の争いに発展し、徳川の天下はなかったことでしょう。

正信が首をひねれば家康が意見を変えたといわれる程、軍事、外交、内政にと、本多正信なくしては徳川は天下を取れなかったであろうと言われるのもむべなるかなと申せましょう。

忖度する側近でなく、家を思い時には諫言してくれる側近を持つことが大切。今の総理に正信がいませんね。

貞花作家康三度死すの一席。